

ありたることを懐かしみ老ゆ

いる理性は、惨めに崩れていってしまふ。これは空腹の極限を味わった者でなければ理解できないだろうと思う。人間社会の互譲の精神とか謙譲の美德などが崩れる時は、何よりもまず、自分たちの生活周辺から食糧が欠乏していく時だと思う。

寒さと飢えから意識が朦朧^{もうろう}と薄れていくような極限状況から生還してもう半世紀以上たった。でも、今でも疲れた晩にはきまって、シベリアの原野をあてもなく歩く夢を見てうなされる。母ちゃんが生きていた時は、夜中によく起こされた。当時の生き地獄のような生活を思い出すと、自分が今生きていることが本当に不思議な気持ちになる。シベリアの凍土の下に残してきた戦友を思うと、俺は死んでも、華美な葬式をして欲しいという気持ちにはなれない。

老いて尚閉する臉に浮かびくる

命の疼く虜囚残像

命あることを哀しと思う日も

【執筆者の紹介】

以上は、父が語ったことを、息子の河野富士夫が文章化し、その内容について改めて父の確認を得たものである。さらに、父が詠んでいた短歌の中からシベリア抑留に関するものを抜き出し、関係する部分に挿入した。

(宮崎県 河野 富士夫)

(旧姓 阿部)

シベリア抑留

九死に一生を得た

東京都 清水 友平

毎日夕方六時になると決まって空襲警報が鳴り、B29が島根県の上空を通過して、一時間後には必ず清津港に飛来する。そして何発かの機雷を投下してから、

反転して太平洋方面へゆうゆうと帰って行くのが日課であった。

ところが昭和二十（一九四五）年八月八日に限っては、夕方の警報がなく、夜中の十一時に警報が鳴ったので、今夜はおかしいぞと隣の宿舎に住んでいる友松さんや一条さんと話をしている時、師管区司令部に直ちに登庁するようにと伝令が飛んで来た。副官部の前は参謀部なので、すぐに情報が分かって先ほどの飛行機はソ連軍機であるとか聞かされ、これは大変な事になったとお互いに顔色がなくなった。どうなることかと心配しながら副官部にてその後の情報を待っていたところ、参謀部よりその後の情報が入るまで一たん皆さんは自宅に帰って良いとの指示が出たので、友松さんと一緒に帰宅した。

寝床に入っとうとうとしていたら、朝五時頃にまた伝令が飛んで来て、直ぐに登庁せよとの命令なので司令部に急行すると、参謀部では羅南地区をはじめ北朝鮮の邦人四十歳以下の男子を根こそぎ召集するという情報で、そのうち召集された兵隊たちが続々と司令部

にも集まり始めた。

更に本年五月に内地より入隊したばかりの兵隊たちが隣接の歩兵第一補充隊より副官部へ配属され、上を下への大変な騒ぎであった。参謀部の情報ではソ連軍は戦車を先頭に鮮ソ国境を越えて前進中と聞かされ、いよいよ戦いが始まったと、各人は顔色がなく司令部も戦闘体制に入った。そして私のもとに兵十五人とトラック一台が配属され、副官部の食糧を確保するために、羅南駅の近くにあった師管区司令部の糧秣庫の食糧を搬出するように命ぜられた。早速トラックと兵三人を連れて出発し、九日、十日と二日間にあたり運べるだけの食糧を搬出するのに精を出した。十日の午後よりソ連軍の飛行機が飛来し始めたので、これはまずいなと思ったが、これが最後の搬出だと思いながら出発した。トラックが駅の付近まで来たとき、トラックに向かってソ連機二機が近付いて来て、我々が乗っているトラックと飛行機が四十五度の角度になったので、これはやられるぞと、とっさに脳裏に浮かび、トラックに直ぐに停車するよう命じて飛び下り、「ト

ラックより遠くへ離れろ、遠くへ離れろ」と叫びながら私に付いて来いと一目散に走った。私の後ろに付いて来たのは村上伍長のみで、斎藤上等兵と佐藤一等兵の姿が見えず、どこに隠れたのかと辺りを見回した。

飛行機はトラックを目掛けて爆弾投下と機銃掃射を繰り返した、そのすさまじさといったら私には初めての洗礼であった。トラックより僅か八〇メートルほどのところに、村上伍長と民家の軒下に隠れ、飛行機の飛び去るのを一時間余りほど待つて、ようやく遠くに去ったので、斎藤と佐藤を探しにトラックのもとへ二人で歩いたが、人影は全く見当たらず、付近は全く死の町と化していた。トラックの下に誰かがいるぞと、村上が大声で「斎藤！ 斎藤！」と呼びながら近付いたが返答はなく、更に近付くと爆風にやられたのか、耳と目より多量の出血をしており、斎藤が即死をしていた。私は必死になって佐藤を探したがなかなか見当たらず、道路脇の防空壕に直撃弾が命中し、佐藤はその防空壕に入っていたのか、片足が飛び出ているのを発見した。佐藤も防空壕の中で即死していた。

私と村上に付いて来れば助かったのに、二人はトラックの下と防空壕の中が一番安全と思ったのが災いの元だった。何とも仕方なく二人で斎藤、佐藤両君を防空壕に葬り、野菊を供えて冥福をお祈りして急ぎ司令部へ歩いて帰途についた。すでに午後四時を過ぎていたが、司令部までは五キロ近くあり、村上伍長と歩きながら二人はなぜ私の後に付いて来なかったのだろうかと、残念で残念で涙がとめどなく流れた。そこへちょうど消防自動車がやって来たので止めて行き先を聞くと、司令部の近くまで行くとのことなので乗せてもらって司令部にたどり着いた。戦友を一度に二人も亡くして申し訳なく、油屋副官殿にこのことを報告してから副官部の皆さんの所へ戻った。

八月十三日より本格的にソ連軍飛行機の爆撃が始まり、また清津港の沖よりソ軍の猛烈な艦砲射撃も始まった。師管区司令部では朝鮮軍管区司令部の指示で、重要秘密書類の焼却が始まり、高射砲で撃墜され不時着して捕まったソ連軍飛行兵二人が憲兵隊に連行されて司令部に来たが、その後どこへ連れて行かれた

か不明であつた。

国境を越えて清津・羅南方面に向かつて前進中のソ連軍戦車隊はどんだんやって来るとの情報が刻々と参謀部に入ってくるので、ますます緊張度が増して行く。

話は少々さかのぼるが、八月十一日には官舎の家族全員に避難命令が出された。私はいつときの余暇ももらつて我が家へ飛んで行き、今までの情報を妻に告げ、これから何が起ころうと、先立つものはお金だと、内地より母が妻に持たせてくれたお金と直感し、通帳と印鑑を持つて銀行へ突つ走つた。銀行も預金を払い戻そうとする大勢のお客で上を下への大変な忙しさで、印鑑なしでも通帳の残高を見て即座にお金を渡してくれた。銀行より持ち帰つたお金を妻に渡し、避難列車に乗る準備に毛布、お米、塩、飯盒、着替え等の些少の持ち物を揃え、これが最後の別れか、再会できるか、必ず元気で内地に帰るのだぞと言い合つて水盃を交わして、後髪を引かれる思いで別れ司令部へ急いだ。すると途中で刀を持つて半狂乱になっている人

と羅南橋の上で出会つた。すると「兵隊さん、この刀は羅南神社の宝刀ですが、あなたに上げるから内地へ持ち帰ってくれ」と懇願され、その宝刀を渡された。私も急ぐので簡単な挨拶をしてその宝刀をいただいて急ぎ司令部に戻つた。

司令部も山に移動する準備で、重要書類の焼却が続いていたが、官舎の皆さんは羅南駅を出発して白頭山の麓の恵山鎮に向かつたという情報を聞き、無事に内地へ帰られるようにと神仏に祈りながら上官の友松さんと語り合つた。

十五日夕方、ソ連軍との戦闘が終わつて停戦になつたとの情報が流れたり、また、飛行機より停戦になつたとのビラがまかれたとか、郵便局に最後まで勤務していた通信兵からも停戦になつたと、色々の情報が流れたが、友松さんと次の情報を待つていた。

十六日の午後になつて西協師管区司令官と白川参謀長が白旗を持つてソ連軍の陣地に向かつて出発した。何か良いお話になるのではないかと心待ちに待つこと数時間、太陽が西に落ちる頃ようやく司令官、参謀長

は軍刀を下げず丸腰になって帰って来た。その姿を見たときはもうだめだと直感した。早速武装解除命令が出て、武器、弾薬を羅南練兵場の指定する場所に集積せよとのことが全員に達せられた。そしてソ連軍に完全に武装を解除された。これで日本の軍隊は消滅してしまい、一遍にあらゆる事、あらゆるもの、あらゆる自由が無くなってしまった。ソ連軍の言うままに動く、魂が消えた人間になってしまい、ただ生きて我が家へ、妻子の元へ帰りたいその一念のみに動く人間になってしまった。ダバイ、ダバイで動かされ、ソ連軍の兵隊はまず我々の時計を狙い、それを拒んだ者はその場で銃で撃たれ即死した者が多く出てきた。

丸腰に食糧を持てる限り持つてソ連軍の命令に従い、集結地の古茂山に向かい歩き始めた。古茂山まで約四十キロで、休憩するたびに疲れが出て、せつかく持つて来た食糧を一つ捨て、二つ捨てて、落後しないようにと目的地に向かい皆が頑張り、古茂山の小野田セメント工場の敷地にたどり着いて収容された。

前述の通り羅南より各人が持参した食糧は、行軍の

途中、疲れ切ったので、一つ捨て、二つ捨てたので、食糧は少なくなっており、まきもなく枯れ草で湯を沸かして飢えをしのいだ。四日ほど過ぎると配給があるとの情報があり、待ちに待っていたが、何と一人一日満州の大豆が茶わんに一杯ほどでがっかりした。私たちは十五人の班で、福島県河沼郡出身の田村二等兵（帰国後彼の音頭で古茂山会を作り、毎年七月末の日曜日に集まる会を作ってくれた）が一番先輩で、大豆で豆乳を作ることを提案され、早速十五人全員の大豆を集め、まき、枯れ草を集める者等当番を決め、田村君の指導の下に作業を始め、毎食豆乳で飢えをしのいだ。なるべくお腹がすかないように横になり、故郷のおはぎ、あん餅等食べ物のお話を話しながら帰国の命令が出るのを待っていた。また田村君は馬の食べる草は人間も食べられると教えてくれた。アオザ（ホウレンソウ科かどうかよくわからなかったが）が多く生えていたので、飯盒で煮て少々灰を入れるとアクが取れてホウレンソウと同じ味がするし、また塩で味をつけて食べるとビタミンの補給に大いに役立った。大

豆を飯盒の蓋でいつて食べた者は夜中に喉が渴くので水を飲む。その水はどんな水だかわからない。泥水？を飲んだ者は翌朝下痢を起こしたり、中には赤痢になったりして死亡した戦友も出た。

私たち十五人は豆乳とアオザのおかげで栄養失調にもならず無事に古茂山を離れることができた。というのは十月終わり頃、古茂山に収容されていたうちの千人に出発命令が出されたからだ。ダモイ（帰国）だともみんなが小躍りして喜び、汽車に乗せられ出発したが、一時間ほどで停車した。汽車が着いた所は清津港で、これは本当に帰国だと再び小躍りして喜び合ったが、段々と様子が変わってきた。港の倉庫に百人単位に分散して入れられた。ソ連軍より通訳に達せられた命令は、今から港にある物資を一片も残さずソ連軍の船に積み込めというものであった。

清津港には日本製鉄所があったので、その機械をはじめとして一握りの鉄屑までも残らず、あらゆる物資を三千トン以上もある貨物船の何隻にも三月末までに積み込みをさせられた。その間重労働の連続ではあつ

たが、食糧の配給があったので、幸い病気にかかる者もなく、積み込みの作業が終了したときは、これで帰国が出来るかと喜んで命令を待っていた。そしてまた汽車に乗せられて移動したが、着いたところは五カ月前に出発した古茂山であった。さてはまただまされたのか、帰国の望みはなくなった。貨物列車に乗ったまま古茂山駅に三日間留め置かれた。北朝鮮は三月下旬といってもまだまだ寒い、陽が差すときはぼかぼかと暖かくなって、氷も解ける。機関車の炭殻を捨てたところで飯盒炊きをするのに、炭殻が凍っていないので誠に都合がよかった。炭殻を掘っていると、驚いたことに人間の手や足が出てきた。その理由を色々調べたところ、赤痢や栄養失調で僅かの期間に多くの戦友が死亡され、土地が凍りついており、掘って埋葬することができなかったもので、やむなく駅の炭殻置き場まで運んで埋葬した事がわかった。列車は再び走り出し、満州の琿春から国境に向かう途中、日本人数人が手を振って我々と別れを惜しんだが、その日本人も無事に帰国ができたのだろうか。

我々はここから行軍でソ満国境を歩いてウオロシロフに向かうことになったが、国境には至るところにソ連軍のトーチカがあり、国境であることがうなずかれた。それからウオロシロフの郊外にたどり着いたが、ウオロシロフは大正七（一九一八）年シベリア出兵の時、日本軍が占領した地である。馬小屋を改造したそこが我々のねぐらに割り当てられた。そしていよいよシベリアの抑留生活が始まった。ねぐらは馬小屋であったが、ロシア人は非常に馬を大切にするので、防寒が施されてあった。シベリア出兵の時、日本軍が使用した馬小屋であったとロシア人より聞かされた。

私たちの部隊は一千人で、いろいろの仕事を分担させられ、私たち十五人はれんがを作る仕事で、毎日トラックに乗せられ四十分ほど走ったところに工場があった。それは大きなれんが工場で、工場長、副工場長、女子事務員二人及び私たちを監督する二人のロシア人で、一人は五十歳ほど、もう一人は四十歳ほどで、「ダバイ、ダバイ（早く仕事をせよ）」で重労働を強いられた毎日であった。

重労働が続き、翌年十月十五日、秋は深まり、朝夕はめっきりと冷え込んできた。朝出発するときに、今日はれんが工場行は中止になり、農場（コルホーズ）の手伝いと聞かされて一同は皆喜んだ。トラックで一時間ほど走って農場に着いた。仕事はジャガイモ掘りで、畑に一列に並んで昼食時になるまで真つすぐに掘り進み、昼食後は折り返して掘った芋をトラックに積み込んだ。久しぶりの野外の仕事で、芋を雑のうやボケット等にできるだけたくさん詰め込んだ。貴重な芋が手に入ったことで作業は意外に手際よく進み、予定より一時間余りも早く終わった。

歩哨の軍曹は帰途につくのはまだ早いからもう少し休めと言って休憩に入った。歩哨が私にトラックに積み込んだ芋をボディーの上にあがって監視せよと言う。歩哨は運転台に入り休むと言って昼寝を始めた。私はトラックのボディーにあがり、大陸特有のたそがれを眺めながら、故郷をしのび、妻子は無事に帰国できたか、お母さんは元気が、商売の方はどうなったかと、次から次へといろいろの事柄が走馬灯のように頭

に浮かび気が抜けた感じで、太陽は西へ西へと落ち続
けて行く。突然ドカンと物凄い音と共に私が乗ってい
たトラックに反対方向から猛スピードで走って来た大
型トラックが飛び込んで来た瞬間に、私はボディーよ
り跳ね飛ばされ、草むらに放り出された。その瞬間美
しい黄色いお花畑が目の前に広がり、私は美しいお花
畑だなあと黄色い美しいお花畑に向かってどんどん進
んで行った。美しい黄色いお花畑の向こう側から「早
く来なさい、早く来なさい」とせきたてて呼ぶ人がお
り、私も余りに美しいのでどんどん歩いて行くと、後
方の戦友が「清水、向こうへ行ったらだめだ、早く帰
れ」と大声で呼んでいる。私は「向こうは立派で美し
い黄色いお花畑だから行くよ」と言っていると、戦友
が「行つてはだめだ、行つてはだめだ」と大声で呼び
止めて、とうとう戦友の呼び止めに負けて帰ろうかと
思った、その瞬間に目が覚めた。その間何分か何十分
かわからないが、私が乗っていたトラックに猛スピー
ドで正面衝突をして両方の車はめちゃくちゃになり、
歩哨の軍曹は即死、先方の運転手と助手三人が即死し

て私だけが助かった。戦友がどつと寄つて来て、私だ
け無事であつたので喜んで収容所の医務室へ行く手配
をしてくれた。トラックより跳ね飛ばされる時に、靴
がボディーの釘に引つ掛かつてワンクッションで道路
の草むらに放り出された。ワンクッションしたこと
でどこも痛むことなく草むらに落ちた。ボディーの釘に
左足の甲を引つ掛けて傷が付き、そこから菌が入
り見る見るうちに左足が膨れ上がった。収容所の医務
室に運ばれ、日本の軍医に診てもらったが、薬がなく
赤チンにて治療してもらった。その後、熱が始めて
三八度以上になり、なかなか下がらずソ軍の軍医も首
をかしげるだけであつた。一週間ほど三八度の熱が続
き、ソ軍の軍医も手に負えず大きな病院へ行く手配を
してくれた。ソ連では三八度の熱が出ると、重病人と
して取り扱われ、早速病院へ行くトラックが来た。二
時間ほど走ってアジョルナヤバーク病院に転送された
が、入院後僅かの期間で十月二十五日頃から熱がどん
どん下がり、松葉杖で歩けるようになった。

十一月に入り、軍医より乗船するまでに歩ける者は

十一月中旬に本年最後の病院船が来るから、その船で帰国させると指示があった。病院長であるソ軍の軍医大佐の前に一人ひとり十メートルほど歩かされ、合格か不合格が決定されるので、精いっぱい元氣良く歩くことができて合格した。その時は嬉しさの余り涙がとめどなく出てしまった。歩哨、運転手、助手と三人が即死したのに私だけが助かり、足にばい菌が入り三八度の熱が一週間以上も続き、病院に入院した途端に熱が下がり、正に九死に一生を得たことは、故郷にて妻や母をはじめ皆さんが神仏にお祈りして下さったおかげと、あれこれ頭がいっぱいになった。合格と言われた時の喜びは今でも忘れることはできない。乗船出航までの一週間が一年間ほどの長期間の思いがした。

ナホトカ港へ行くトラックが迎えに来た。乗船まで四日程あったが、いよいよ乗船だ。港に船が横付けになった。船腹に赤十字のマーク、空に高々と日の丸の国旗だ。国旗を見た途端、「国破れて山河あり」、国は健全だ、故郷はあるという感激で胸がいっぱいになり、自然と涙が込み上げてくる。甲板に白衣の天使の

看護婦さんや船員さんを見て、悪夢から我に帰った。戦友より乗船のお手伝いをしていただいて無事に乗船ができた。

多くの戦友が病死し、まだまだ多くの戦友が酷寒の中で重労働を強いられている時に、帰国するのは後髪を引かれる思いであったが、船は函館港に向かって出航した。そして函館港に昭和二十二年十二月一日無事に着いた。

（平成十（一九九八）年一月二十日 思い出して）

二伸 妻子は官舎の皆さんと羅南駅より列車にて恵山鎮に向かって出発したが、ソ連軍が山の方から鉄道沿線に前進しているという情報のため、列車をバックして引き返し走ったが、また海岸線沿いからもソ連軍が前進中の情報があり、総指揮をされた金子少尉殿もここで自由行動に移ろうと解散することになった。

各人は三八度線に向かい歩き始めた。上官の友松さんの奥さんのもとと体が弱く、歩く途中二人の男子の子供さんが介抱されたが、介抱の甲斐なく亡くなら

れた。私の妻子は官舎のお隣の一条さん（ご主人は騎兵隊）と力を合わせ、威興―元山へと歩き、元山のお寺に落ち着き、三八度線の川（漣川）を渡るのに舟が必要なので、日本へ帰ってからお返しする約束で、お寺からお金を借りて五、六人で舟を雇い三八度線の川を渡ることができた。そして川岸にて米軍に迎えられて京城（ソウル）へ移動し、さらに京城より釜山へ、そして昭和二十一年五月に箱崎港に上陸して無事帰国ができた。

シベリア抑留二十話

福井県 片山清次

第一話 タイシエットーブラーツクの地理

この地は、シベリアの中央あたりに位置し、北緯五六度の緯度の範囲に入る。この緯度を右に辿って行くとカムチャツカ半島の中央を横断している。

夏季は、昼間が長く午前零時頃まで戸外は薄明るい

反面、午前四時には夜が明けている。メーデー近くになると、原生林の松の下に残っている雪が急激に溶け始め、小さな流れとなって凍った大地がぬかるんで来る。激しく長い冬を耐え抜いた迎春花が松の木の下から顔を出す。と見る間に可憐な花が咲く、この力強い開花をきっかけとして原生林に春が訪れる。ロシア人は、ポドスネージニクと呼び春の訪れの目安としている。日本では「まつゆきそう」と呼んでいる。

そして、あたりは明るい緑に装われ一足飛びに夏を迎える。その頃になると虫類が活発に活動を始める。

日本の蚊と種類が違うのか、水たまりに棲息するボウフラは、マツチの軸ほどの太さで約一・五cmの体長に剛毛が生えている。水底から水面に忙しそうに浮かんでは沈んで行く。最初は小魚ではないか？と見間違った程であった。その蚊の大群に襲われる。シベリアは冬が寒いから夏はさぞかし涼しいだろうと思われるが、日本の夏と同じように暑い、大陸性で湿度が低く日陰に入ると凄まじい。蚊の大群より恐ろしいのはムシカである。日本では蛸ツノと呼ばれているゴ